

令和元年度 近畿中国森林管理局事業評価技術検討会（持ち回り開催）で出された意見と回答

技術検討会（持ち回り開催）で委員から出された意見	意見に対する近畿中国森林管理局の回答
<p>生産林管理については、環境に配慮した体系的な管理目標が立てられるべきとの議論があることから、森林環境保全整備事業においても、それらを参考にしながら最適な伐採方式等を決めていくべきではないか。</p>	<p>同事業で実施する主伐は、小面積皆伐を採用することで積極的に広葉樹を保残することにし、針広混交林等からなる多様な林相の森林を誘導・整備していくこととしている。</p> <p>また、路網の開設については、景観や生態系の保全に配慮した線形、構造及び施設を選択するとともに、土砂の流出や崩壊を起こさない施工技術を採用している。</p>
<p>間伐対象林の齢級は10 齢級以上が多くなっていることから、最終的な商品である主林木の価値を高めるとともに成長量を維持するため、さらには炭素固定能力を下げないためにも列状間伐より選木間伐が妥当ではないか。</p>	<p>搬出を伴う間伐については、林木の生育状況や立地条件等を考慮し、1 伐2 残、1 伐3 残等の列状間伐や選木間伐等を選択のうえ、効率的に実施することとしている。</p>
<p>現状ではシカのコントロールは万全ではなく食害のリスクが高いことや、シェルター等の獣害対策経費も高額であることから、伐期延長等により皆伐を回避することが妥当ではないか。</p>	<p>獣害対策の必要な地域については伐期延長等も含めて検討しているが、主伐を実施する場合は地形的特徴や対象面積等を勘案し、防護柵やシェルターのうち、より経済的で効率的に設置できる獣害対策を採用することとしている。</p>

上記のとおり、委員から出された意見に対し近畿中国森林管理局から説明した結果、委員からは妥当な計画であるとの了解が得られた。